



No. 190

ティークレイク

Tea Break

小鹿物語の向こう側に

会員 正林 真之

当家でも「子供たちの巣立ち」という別れが確実に近づいているこの時期に、以前の家族である自分の生家のほうでは、ついにこの日がやってきた。弟からの連絡で、父が養老院に入ることになったことを知ったのだ。父親も、往年の勢いは無くなってはいたが、ただもうそれが「片道切符」であることを悟っていたようである。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」と、僕が出かけるときにはいつでも纏わりついてきた7歳年下の弟。可愛い、可愛いと思っていた半面、煩わしさを感じながらも、一緒に暮らし、じゃれ合いながら育ってきた兄弟。そんな幼少時期を過ごしながらも、いつしか大人になり、その弟から「兄貴」と呼ばれるようになって、もう30年以上も経つ。そんな弟が今、電話口の向こうで、「お兄ちゃん」と呼んでいる。とにかく、電話口の向こうでは、「お兄ちゃん。俺、俺…」と泣きながら話をしていて、言葉にならない。

むろん、そして、言いたいことはおそらく、「自分は本当に正しいことをしたんだろうか」と、そういうことである。どうも親父は、片道切符であることを自ら悟りながらも、しみじみとお礼を言うという昭和一桁らしからぬことをしたようである。そしてそれが弟の感情を強く刺激して、彼の兄に泣きながら電話をさせるに至ったわけである。

こういうときに、長男や長女というのは泣けない。弟や妹に先に泣かれてしまうために、自らは意地でもしっかりするしかないからだ。「となりのトトロ」という映画の中でも、入院した母親が退院予定日に帰れないことが分かったら、妹のメイは、その理由をしつこく姉に問う。けれども、当の姉とて、まだ子供。小学校5年のサツキには分かるはずがない。サツキは、子供の心では到底受け入れられきれない現実を受け入れ、じっと耐えて

いるのに、妹のメイは、いきなり泣き出す。

妹が先に泣くものだから、姉のほうは泣けない。泣きたいのはむしろ自分のほうなのに、泣けない。これが長女の宿命というものである。けれども、妹が居なくなると今度は、誰かに優しい言葉をかけられた途端に泣き出してしまふ。そう、むしろ泣きたいのは自分のほうだし、そして誰かにすがりたいし、誰かに慰めてもらいたいのは、実は姉のほうなのである。

ところで、もしあの親父も、最後まで嫌われ者の頑固親父でいてくれたんなら、弟を悲しませることもなかったのではないかとも思う。けれども、人生の末期において、そんな悪役を演じることができるようになれるものなど居るものか。

とはいえ、親父の送迎の報告を泣きながらしてきた弟。電話口の向こうにいるのは、もう大きく成長したアラフィフのオヤジなのだが、脳裏に浮かぶのは、あの頃の「お兄ちゃん、お兄ちゃん」とまだ私のことを呼んでいた幼少の弟の顔である。けれども私は、泣きたいものこらえ、かといって同情してやることもせず、「なら、代わりに俺がやってやろうか」ということは、ついに口にはしなかった。

巷には、「長男気質」とか、「末っ子気質」といったような言葉もあるが、そういったものは、こうしたギリギリの場面では如実に表れてくるものなのである。

翻って、特許事務所の経営である。経営の上では、退職勧告をしなければならぬこともあるだろう。そうなるのは、もちろん本人の適性もあるかもしれないし、事務所との相性もある。けれども、いずれの事情であるにせよ、誰かが実際に手を下さねば、物事は進まない。

そうしたときに、誰がそれをやるのか。もちろん、たいていは、そういった辛い役回りは所長自らが買って出ることになるのであるが、ときには、あえてそれを部下にやらせるのである。たとえ無理かなと思っても、あえてそれをやらせるのである。そして、そうした経験を経て、人というのは成長する。「人というのは、友と出会い、友と別れて成長する」と言っていたのは確か、ステープン・スピルバーグであったと思うが、どんな場合であっても、別れというのは、人間の心に深みを持たせるものであり、それを通じて人は大きく成長する。

もちろん、こうして色々と学習させ、人間を成長させるのは、手間もかかるし、時間もかかることである。かなりの忍耐や、不安や心配に耐える胆力や忍耐力も必要である。けれども、その成長を待てないような経営者というのでは、100人以上の中規模事務所を作ることは、できない。もし部下に任せずに所長自らが全てを行ってしまうと、そうしてしまうことにより、所長だけが、こういった経験を通じて成長し、部下は一向に成長しないのである。

もちろん、「部下に任せるよりも、自分がやったほうが、早い」という理屈は、よくわかる。実際、私もよくそう思った時期もある。けれども、「格差社会」とは言われるが、経験やスキルの格差が拡大してしまい、その間のギャップが広がれば広がるほど、その集団のまとまりが悪くなる。そうになると、たとえ同じ単語を使って話をしたとしても、意思疎通が困難なものとなり、ついにはまともな議論が成立しなくなる。そしてそれは最終的には、その事務所の「成長が止まる」という現象となって現れてくる。

そうして見てみると、弁理士というのは専門職だけあって、基本的には自分自身のスキル向上にやたら熱心なものであるのであるが、そうした中において、特に創業所長というのは、色々な試練を与えながらも人を成長させる人物が多いように思える。そしてまた、特許事務所の所長には、なぜか長男が多いというのも、何となく頷けるような気もする。けれども、先の父親の見送りのようなケースでも、もはや大人になった弟の成長まで考えてしまうというのは、もはや病気に近いものであり、しかももう治りようがないようにも思える。

もちろん、もしこれを直すような方法があったとしたならば、是非ともそれにすがってみたいような気もするが、誠に情けないことに、その方法が目の前に来たときに直ぐにそれを選べるのかどうかは甚だ自信のないところである。果たしてリタイアの際に完全に跡を濁さずに出ていくことができるのかどうか。言い換えれば、私を送る人物に心理的な負担を一切与えない状態できれいに去れるのかどうかについては、養老院に送られる親父の様子や、事業承継の際に何かともめる特許事務所の所長の様子を見るにつけ、まったく自信が持てていないというそんな有様である。

であるので、もしこれが小鹿物語であったのなら、撃つほうも、撃たれるほうも、その一瞬だけは AI 搭載の機械になれないものかと、もしできるなら是非ともそのような発明がなされて欲しいものであると、そんなことを思ったりもするのであるが、でもやはり、その本人に辛い試練を与えてやらねば伸びはしない。所長業を続けて、既に早 20 年以上。誠に悲しいことに、これで培われた人格は、もはや治りようが無いようにも思える。